

今週の本棚

今週の本棚・本と人:『「里」という思想』 著者・内山節さん

◇グローバル化に哲学から警告――著者・内山節(うちやま・たかし)さん

群馬の山村で1年の半分を過ごし、釣り糸をたれ畑を耕す哲学者。残りは大学教授として東京に滞在する。「里」とは、グローバルに対するローカルの意。「自分が還っていきたいと思う場所」という。<「里」からすべて組み立てなおす必要がある>。テロや環境問題など、テーマは多岐(たき)にわたるが、根底にある思いはひとつだ。

背景には、グローバル化により、それぞれの土地の歴史性が失われたことへの危機感がある。端的な例が米国だ。「米国は先住民の歴史を破壊したという自分たちの歴史を拒否することによって成り立っている社会。近代以降を絶対視せざるを得ない国を中心に動いているのが今の世界」

その懸念が現実になったのは、9・11同時多発テロだった。「テロはグローバル化した世界に対するローカルからの異議申し立て。ああいう形でしか反撃できない人間を作り続ける世界とは何なのか。哲学の視点から考えたい」

70年代からフランスを訪れ、移民の同化政策と差別を見てきた。20世紀には世界の一元化によりさまざまな矛盾がなくなるという夢が描かれた。「しかし現実は違った。いま目指すべきは世界の細分化ではないか」。相次ぐテロや暴動を前に思いは深まる。

近代以降の世界はローカルなものを置き去りにしながら経済的な一元化の道を歩んできた。一方、村での山とのかかわり方は単なる技術ではなく、深い思想がある。

たとえば小正月の飾りに他には使い道がない木を使う。「そうすれば森の負担を少なくできる」と村人は語る。時代を超えて受け継がれる精神文化、歴史……。自然と人間の関係についての日本と欧米の認識の違いから、世界の一元化の無謀さを説く。

若いころは西洋の思想にひかれた。しかし今は、哲学の問いの答えは土地の風土や文明の中でつかみ取るものだと考える。その思いを強くしたのが釣りのため訪れた上野村との出会いだった。

「村には千年前から誰かが耕してきた畑がある。だったら自分も同じ生き方でいいんじゃないかと思えるんです」<文と写真・手塚さや香>

(『「里」という思想』は新潮選書・1155円)

毎日新聞 2006年2月5日 東京朝刊